

## 平成28年度 第2回 理事会を開催



【理事会の様子】

### 新たな活動体制の整備を協議

#### 販売支援に関する相談が大きく増加

11月28日(月)、東京都千代田区において、平成28年度 第2回 理事会を開催し、議案の協議とともに、上半期の活動について報告を行いました。

理事会には、当機構の理事13名とオブザーバー13名にご出席いただき、議案の協議と上半期の活動の報告が行われました。主な議案は次の2点です。

#### ◆農業経営者等の支援団体による連携体制の整備

次の4団体が連携し、情報の共有、各団体の専門性を活かした農業経営者等への支援などを

行う体制を整備する。

- ・一般財団法人 日本GAP協会
- ・一般社団法人 日本食農連携機構
- ・公益社団法人 日本農業法人協会
- ・NPO法人 日本プロ農業総合支援機構

#### ◆「J・PAO参与」の付与

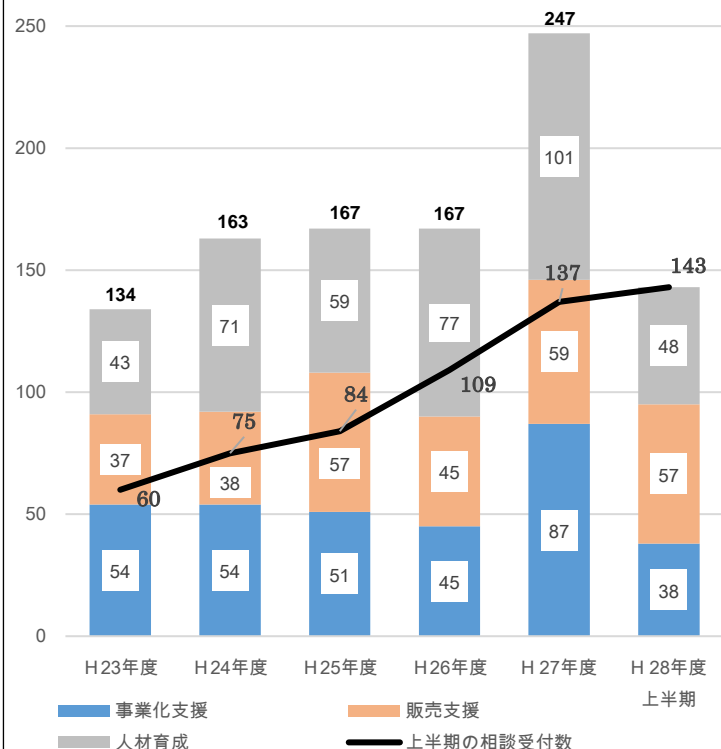
当機構に寄せられる農業経営者からの経営相談に対して、的確に対応するため、相当程度の専門的知見及び経験をもつ会員をその担い手として委嘱し、「J・PAO参与」の称号付与により、当機構業務の一翼を担っていただく。

\*

上半期の相談件数は計143件で、過去最多となりました。

事業別にみると、事業化支援は38件で、新規事業に伴う経営分析や計画策定、農業者の計画達成のフォローアップなど、前

【事業別相談件数の推移】



向きな事業支援に関する相談が全体の約7割を占めています。前年同期比72%ですが、これは、前年度は上半期に実施した事業が今年度は下半期に繰り上がったことが要因です。

人材育成・普及啓発支援は48件(同102%)で、ブランディングや経営スキル向上のための研修等への講師派遣が大宗を占めています。

また、業種別で見ると、農業者からの相談割合が全体の約半分を占め、増加傾向(同116%)にあります。

J・PAOは、今後も引き続き、プロ農業者のお役に立てるよう、より一層邁進してまいります。

## 「第9回 トップマネジメントセミナー (2/10開催)」セミナーの申込受付中

多くの方からトップマネジメントセミナーのお申込みをいただきありがとうございます。

懇親会はすでに定員に達したため、キャンセル待ちとさせていただきます。

セミナーは、お申込を受付けていますので、みなさまのご参加を心よりお待ちしております。

例年より早いペースでお席が埋まっていますので、ご興味のある方はお早めにお申込みください。

### 【セミナー概要】

■日時：平成29年2月10日(金)  
13:30~16:45 (受付開始 12:30)

■会場：日比谷図書文化館(東京都千代田区)

### ■プログラム

基調講演：小泉 進次郎 衆議院議員(予定)

パネルディスカッション

<パネリスト>

- ・木内 博一 氏/(農)和郷園 代表理事
- ・木之内 均 氏/(有)木之内農園 代表取締役会長
- ・斎藤 一志 氏/(株)庄内こめ工房 代表取締役
- ・澤浦 彰治 氏/(株)グリーンリーフ 代表取締役

<コメンテーター>

- ・大泉 一貫 氏/宮城大学名誉教授
- ・坂本 多旦 氏/みどりの風協同組合理事長

<コーディネーター>

- ・高木 勇樹/J-PAO 理事長

### ■参加費(税込)

- ・3,000円(セミナーのみ)

※懇親会は定員のため、キャンセル待ち

### ■お申込み方法

- ・弊機構 HP から開催案内(PDF)をダウンロードし、記載の方法にてお申し込みください。

詳細はHPからもご確認いただけます。ご興味のある方は当機構(担当:高田)までお気軽にご連絡ください。

ーム秋田(平成28年8月設立)の業務内容やビジネスモデル、今後の事業などについてご紹介いただきました。

## 専門部会の動き(11月分)

### 【販売支援】

6次化商品の開発に取り組む農業生産法人をお招きし、野菜加工品を題材として、商品の訴求ポイントやパッケージのデザイン性、今後の販路拡大の方向性などについて部会メンバーと意見交換しました。

### 【事業承継】

「経営継承と後継者育成」の専門家をお招きし、後継者育成に注力する理由、事業承継でよく生じる問題、関係者それぞれの役割を時系列で表した事業承継フローなどについてお話しいただき、部会メンバーと意見交換しました。

### 【J-PAOビジネスモデル】

先月に引き続き、経営支援サービスについて、新たに作成したリーフレット案を見ながら、サービス内容を再度確認しました。部会メンバーから意見の出た修正点について、事務局が修正版をとりまとめ、次回の専門部会で提示することとなりました。

### 【人材育成】

J-PAOが現在行っている人材研修(JAバンク山梨ニューファーマー育成スクール、企業派遣型課題解決ワークショップ研修)について、現状の報告を行い、今後どのように運営方法や講義内容を改善していくとよいか、部会メンバーで議論しました。

## 会員の活動紹介

11月の企画運営委員会では、株式会社大潟村あきたこまち生産者協会から、三井住友銀行などと共同で設立した「株式会社みらい共創ファ

## 主な活動(12/1~12/31)

12/14 第109回企画運営委員会

往復書簡(後編)

北海道で牧場経営等をされている延興雄一郎さん(株式会社ノベルズ 代表取締役)。前編でもご紹介いただいたバイオガスプラント運営等の地域貢献プロジェクトについてお話しいただきました。

拝啓 高木 勇樹様

年の瀬も間近になって参りましたが、ご健勝のこととお喜び申し上げます。

北海道十勝は、例年よりも降雪が早く、牧場も、周辺の畑も、一面の銀世界です。寒さに負けない牛たちも、生後間もない時は、飼養管理には特に特に気を配らなくてははいけません。

先月の往復書簡では、私たちノベルズグループが取り組む地域貢献のプロジェクトに、ご意見を賜り、大変有難く存じます。地域に電力と有機肥料を供給する十勝管内清水町のバイオガスプラントは、来春の操業開始に向けて建設が進んでおりますが、あらためて耕畜連携のあり方をコストやリスクの面から検証していかねければ、と気を引き締めております。

ノベルズグループは、ちょうど10年前に、私の生家が営む子牛の育成事業から独立する形で、肥育事業をスタートさせたのが始まりです。交雑種の雌牛を32カ月以上の長期飼養することで、肉に旨味を乗せて付加価値を高めると同時に、この期間に黒毛和種の子牛を生ませる事業モデルを構想し、畜産業に関わる多くの方々のご指導を受けて、ようやく事業を軌道に乗せることができました。

現在、ノベルズグループが推進している地域貢献のプロジェクトの核となるバイオガスプラントは、十勝・根釧地域における長年の試行錯誤によって培われた技術がベースになっています。自然エネルギーの利用拡大を図る政策的な後押しもいただき、事業化に踏み切った経緯もございませぬ。

畜産関係の方々、そして地域の方々のお気持ち、ご支援を受けて、初めて私たちの今日があります。感謝の言葉もございませぬ。ただ一方で、十勝の基幹産業である農業は、就業人口の高齢化や担い手不足が懸案であり、その将来が見通せない厳しい現状にあります。「ならば、自分たちにも何かできることはないか」との思いが、私たちの耕畜連携の原点です。

地域の農家の方々に目に見える形でメリットを享受していただければ、プロジェクトの成功はあります。例えば、今後、バイオガスプラントが稼働すれば、副産物として、消化液と呼ばれる有機肥料が得られますが、雑草の種子を高温で死滅させる処理を施すことから、従来の堆肥が抱える雑草の問題が克服できるとの期待があります。また、液状で保存や輸送も比較的容易で、散布用の農機の調達や

作業はノベルズグループが受け持つ計画です。消化液を活用する輪作とはどのようなものか、畑作農家の方々の共同研究も必要と考えています。その結果として、飼料向けデントコーンを栽培 提供いただければ、私たちの牧場経営に大きなプラスになります。

もつともプロジェクトは、緒に就いたばかりです。農業の経営形態が多様である以上、耕畜連携の形も、ケース・バイ・ケースで、柔軟でなければなりません。たとえ想定外の課題に直面したとしても、社員一同、力を合わせて乗り越えていく所存でございますが、地域の方々、農業に関わるの方々のご支援があつて、初めて耕畜連携があると考えております。

今後とも、ご指導、ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。日毎に寒さがつづのり、体調を崩しやすい時期でもございます。どうぞ、くれぐれもご自愛ください。

平成28年12月吉日

敬具

延興雄一郎(えんよ ゆういちろう)

1978年 北海道土幌町生まれ  
2006年 株式会社ノベルズを創業  
株式会社ノベルズ 代表取締役。高校を卒業後、米国の肉牛牧場で1年間の研修を経験。ノベルズグループの主要8社は、肉用牛の素牛、肥育牛、生乳の生産牧場の経営のほか、交雑種雌牛の自社ブランド「十勝ハーブ牛」を扱う食品事業を展開。



拝復 延與雄一郎様

今年も早いもので師走を迎えました。

「冬来りなば春遠からじ」と申しますが、北海道十勝の冬の厳しさは、少しの降雪でおたおたする東京人には到底想像出来ないものと思います。

特に畜産という、家畜の「生命」を預かる産業の経営は、二重、三重のご苦労とのたかいかいであろうと拝察致しております。

先月の往復書簡で、地域貢献プロジェクトについて気づいた点を三ほど申し上げましたが、そのひとつひとつについての検証結果と取り組みの思い・動機を丁寧にご説明いただき、一層理解が深まりました。

地域に支えられてノベルズグループのビジネスモデルがあるのに、十勝の基幹産業の農業の将来が見通せない厳しい現実を見据えた結果の結論が耕畜連携であると。

十勝地域のように畜産・畑作混在の農業展開が可能な条件を有しているところでは、誠意的を得た視点だと思えます。

これまでも耕畜連携は政策としても熱心に取り組まれたことがありません。代表的なものが「稲わら」です。結論的に申し上げますと、畜産地帯と耕種（特に稲作）地帯が離れていることで、補助金が出ればその限りで行われ、カネの切れ目が何とやらで、定着せずに終わりました。

十勝地域は畜産、耕種（畑作）が混在する耕畜連携の基盤がしっかりとあるところですが、しかもこのプロジェクトは机上の空論でなく、試行錯誤を積み上げて到達したものです。

そしてキーワードが「地域の農家の方々に目に見える形でメリットを享受していただく」ですから、成功は間違いないと確信しております。

それでも心配症の小生は、畜産をめぐるこれまでの内外の情勢変化の歴史に学ぶところがあるのでとはと考えてしまうのです。

直接関係ないようにみえる昨今の低迷する石油・原油市況、この背景には米国におけるシェールガス開発の成功があるのです。

電気自動車の普及がエネルギー問題に与える影響も目を離せません。他産業、異業種での技術開発、その応用・発展のスピードは加速してきており、また英国のEUからの離脱、米国でのトランプ大統領候補の勝利など内外の情勢変化は不確実性を増しています。

アンテナを高く張り、あらゆる変化のかすかな萌しにも若い感性で目をこらし、チャンスとしてください。

ノベルズグループの弥栄と十勝農業の発展をお祈りするとともに、素晴らしい佳き新年をお迎えください。

平成28年12月吉日

敬具

## 高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

1943年 群馬県生まれ

1966年 東京大学法学部卒後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官などを歴任

1998年 農林水産事務次官、2001年退官

2002年 ㈱農林中金総合研究所理事長

2003年 農林漁業金融公庫総裁、2008年同公庫退任

2007年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国の農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力

